

「幼児体育」において学生による模擬授業の検討

～教材開発の観点から～

高田佳孝

TAKADA Yoshitaka

山中愛美

YAMANAKA Aimi

本論文は、本学の必修科目である「幼児体育Ⅰ」をうけての必修科目「幼児体育Ⅱ」における2016年度の授業実践報告である。また、『「幼児体育」における教材開発に関する一考察』（高田、2016）の継続研究でもあり、模擬授業を中心とした内容の授業展開に着目した。「幼児体育Ⅰ」で履修した教材・教具を使って、創意工夫した各種の身体運動（運動あそび、ゲーム、スポーツごっこ、リトミック、ダンス等）を実践した。この授業では保育の中で行われる「幼児体育」の指導力を、模擬授業を通してより実践的な力を培うことを目的としている。模擬授業では自らが保育者や教育者となり、実際の指導場面に近い状況を作っている。その中で今までのスキルを生かし指導者としての立場を経験しながら、授業を創り上げていく過程で、指導技術や実践的な能力を高めることをねらっている。学生自身が今後の実習や保育場面で、使える教材、使える指導法として有効的な授業展開をめざし、実践した。

キーワード：幼児体育、模擬授業、教材研究、教材の工夫

1. はじめに

幼児体育の目的は、子どもたちが生き生きとした人生を楽しむのに必要なスキル・知識・態度の基礎が身に付くような動きを中核とした学習の場を多様に供給することである（前橋、2008）。また岩崎ら（2012）は、幼児期の健康によい効果をもたらす運動を考えるとき、単に運動能力や運動技能が向上すればよいと考えるのではなく、生活や遊びが充実し、子ども自身が運動を楽しみやすいこととして経験することが必要と考える。

前橋（2008）は、幼児体育の目標を達成するための8つの指導領域を提示している。（1）基本運動スキル（Fundamental Movement Skills）（2）知覚運動スキル（Perceptual-Motor Skill）①身体認知（Body Awareness）②空間認識（Spatial Awareness）③平衡性（Balance）④協応性（Coordination）（3）動きの探求（Movement Exploration）（4）リズム（Rhythms）（5）体操（Gymnastics）（6）簡易ゲーム（Games of

Low Organization）（7）水あそび・水泳（Swimming）

（8）健康・体力づくり（Health Related Fitness）

近年の幼児の身体や生活実態と照らし合わせてみて、逆さ感覚や回転感覚を育てる倒立や回転運動、反射能力やバランスを保ちながら危険を回避する鬼遊びやボール運動、空間認知能力を育てる「這う」「くぐる」「回る」「登る」などの運動が特に幼児に必要とされている（前橋、1999）。幼児期は、生涯にわたる運動全般の基本的な動きを身に付けやすく、体を動かす遊びを通して、動きが多様に獲得されるとともに、動きを繰り返して実施することによって、動き方が上手になる洗練化も図られていく（文部科学省、2015）。

また、指導者は運動遊びの指導にあたり、技術の獲得・向上の指向も大切だが、知能の発達と運動機能の発達とを合わせて、精神運動機能として理解し、ひとり一人の幼児理解をもとに、幼児の立場、その量と質を考え、より豊かな運動遊びを経験させることが重要であると考え（菊池、2004）。さらに大人からの視点や他の子どもとの比較ではなく、個々の子どもの進

歩・上達や、一生懸命取り組んだり新しい運動に挑戦したりすることなどを認め、大切にしていることによって、全ての子どもが運動に対する有能感をもてるように配慮することも重要である（杉原ら、2008）。

体育授業を行うにあたり、学習内容が豊かに習得されるためには、手段的機能を担う「教材」が必要となってくる。なぜなら「教材」とは、学習内容を習得するための手段であり、その学習内容の習得をめぐる教授＝学習活動の直接の対象となるもの（岩田、2007）だからである。岩田（2012）は、教材づくりの基本的視点として学習意欲を喚起するために、①子どもの興味・関心に配慮しながら、能力の発達段階に応じた適切な課題が提示されるべきであり、②すべての子どもに技能習得における達成やゲームでの学習機会を平等に保障していくこと、また、③取り組む対象が挑戦的で、プレイの面白さに満ちた課題であることなどが求められる。これらの条件は、とくに運動学習の指導の方法論と密接に結びついていると提言している。また「教具」については、以下のような主要な機能が内包されている。①運動の習得を容易にする（課題の困難度を緩和する）。②運動の課題性を意識させ、方向づける（運動の目標や目安を明確にする）。③運動に制限を加える（空間・方向・位置などの条件づける）。④運動のできばえにフィードバックを与える（結果の判断を与える）。⑤運動の原理や概念を直観的・視覚的に提示する（知的理解を促し、イメージを与える）。⑥運動課題に対する心理的不安を取り除き、安全性を確保する。⑦運動の学習機会を増大させ、効率を高める。（岩田、2002、2003）したがって「幼児体育Ⅱ」の模擬授業においての教具についても同様の機能が内包されることが望ましいと考える。

そこで本研究では前期に行った本学必修科目である「幼児体育Ⅰ」の履修内容を生かし、模擬授業を実践した結果、受講生がどのような省察を行ったかを明らかにすることにより、幼児体育を指導する上で有効な教材であったかどうか、創意工夫された教材・教具となったかを検証する。また、高田（2016）の現場経験のない学生にとって、幼児がどの程度の運動能力や認知能力が備わっていることを把握し指導することは、決して容易ではない。しかし指導者として発達段階によって適切な教材を与えることの重要性や、実態に合わせて指導内容を変容させる大切さを学ぶことは不可欠である。この報告をうけ「幼児体育Ⅱ」の授業実践を検討する。

2. 方法

調査期間：平成28年9月27日～平成28年12月23日

調査対象：「幼児体育Ⅱ」履修者

短期大学1回生 99名

収集データ：学生自身の授業記録

各自の指導案

模擬授業後の自己評価アンケート

模擬授業後の省察記録

3. 授業展開とプログラム

表1 2016年度「幼児体育Ⅱ」授業展開

科 目 名	幼児体育Ⅱ
単 位（授業形態）	1単位（演習）
担 当 者	高田 佳孝・山中 愛美

授業の到達目標

幼児体育の基本について学ぶ。

ねらい：模擬授業（保育）を通じて、ごっこあそび・運動あそびの指導法・安全管理を学習する。

目標：実際に子どもをやる気にさせるにはどのようにすればよいのか、受講者間で議論し、将来の保育に活用できる能力を身につける。

キーワード：幼児体育、模擬授業、指導

授業の概要

1. 幼児体育Ⅰで修得した技能を参考に、各自が模擬授業を実施する。
2. 模擬授業を実施した学生に対して受講者がコメントし、お互いに切磋琢磨できる環境をつくる。

全体の授業計画・内容

1. ガイダンス
2. コーチングから指導法を学ぶ
3. 指導法と指導案の作成について
- 4～14. 模擬授業（1人20分間の指導を実施し、受講生間で指導の仕方を学ぶ）
15. まとめ（子どもをやる気にさせる方法について）
※講義の進捗状況によって内容の変更がある。

準備学習の方法

予習のあり方：模擬授業を実施する際、各自がオリジナルのあそびを創意工夫して指導できるようにする。

復習のあり方：毎回、模擬授業で気づいたことを指導案に記録し、今後の活動に役立て

るようにする。

成績評価

授業態度 (50%)、模擬授業 (25%)、提出物 (25%)
により総合的に評価する。

テキスト

授業中に資料を配布する。

参考文献

日本幼児体育学会『幼児体育—理論と実践—』大学教育出版
 羽崎泰男『イラスト版 からだあそび』合同出版
 菊池秀範『幼児期の運動あそびの指導と援助
 —鉄棒・跳び箱・マットあそびの補助を中心に—』萌文書林
 岩崎洋子(編)『保育と幼児期の運動あそび』萌文書林

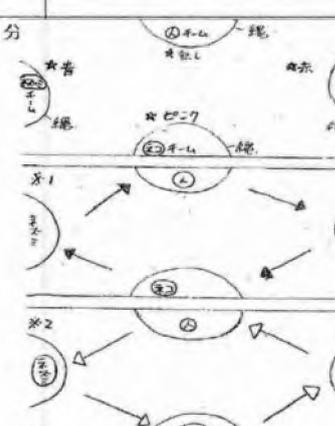
表1で示す模擬授業については、受講生一人あたり20分間の運動遊びの指導案を作成し、実施した。指導案作成に関しては、指導者が主体的にそれぞれの指導目標や内容、方法を明確にする(大貫、2015)ことや体育授業において単に「できる」ようにするだけでは「よい」授業とはいえない(大貫、2010)ことなどを助言した。また、「幼児体育Ⅰ」で履修した教材・教具をそのまま使うのではなく、オリジナリティの要素の入ったものに変化させ、創意工夫された教材・教具になるよう支援した。模擬授業終了後には、指導者となった受講生が反省を発表し全体でリフレクションを行った。また自己評価やワークシートに省察することとした。
 以下に道具に関する実践とルールや理解に関する実践の「運動あそび」の指導案を示す。

表2 運動あそび指導案「バランスリレー」

幼児体育Ⅱ「運動あそび」指導案						
テーマ「	バランスリレー			」学生番号()氏名(
指導日時	月	日	曜日	時間目	対象年齢	3歳児 4歳児 5歳児
本時のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ボールと新聞を巧みに操作して進む動きを身につける。 ルールを守って楽しくリレーをする。 友だちと協力しながら運動を楽しむ。 					
準備するもの	<ul style="list-style-type: none"> 新聞紙8枚 コーン4個 小ボール4個、大ボール4個 					
時間	環境構成 (留意点を含む)		子どもの活動		指導者の活動	
2分			<ul style="list-style-type: none"> 7~8人グループを作って並ぶ。 ぶつからないように広がる。 準備体操をする。 		<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちの表情を見ながら、指示を出す。 準備体操は、音楽に合わせて行う。 	
9分			<ul style="list-style-type: none"> 集まって遊びの説明を聞く。 分からないことがあれば、質問する。 先生の合図によってバランスリレーをする。 ※落としたりしたらその場所からボールを乗せてやり直す。 チームを応援する。 		<ul style="list-style-type: none"> 遊びの説明をする。 分からないことがないか確認する。 スタートの合図を出す。 落としたりした人に「大丈夫」「落ち着いて」など声をかける。 コーンを回れているかどうか見る。 正しい方法でできているか見守る。 	
8分			<ul style="list-style-type: none"> 次はペアを作って行う。 説明を聞く 2人で協力して運ぶ。 ※落としたりしたらその場所からボールを乗せてやり直す。 チームを応援する。 		<ul style="list-style-type: none"> ペアになっていない子がいたら、交代できるように声をかける。 ペアで運ぶことを説明する。 スタートの合図を出す。 一緒に応援する。 	
1分			<ul style="list-style-type: none"> 先生の話聞く。 		<ul style="list-style-type: none"> みんな楽しく取り組めたか感想を聞く。 ケガ等ないか確認する。 	
【コメント】						

表3 運動あそび指導案「4種鬼ごっこ」

平成 28 年度

幼児体育Ⅱ「運動あそび」指導案								
テーマ「4種鬼ごっこ」		学生番号()		氏名()				
指導日時	月	日	曜日	時間目	対象年齢	3歳児	4歳児	5歳児
本時のねらい		<ul style="list-style-type: none"> ・周りを見ながら走る、空いたスペースに逃げ込む動きを身につける。 ・ルールを守って楽しく鬼ごっこをする。 ・友だちと協力しながら運動を楽しむ。 						
準備するもの		<ul style="list-style-type: none"> ・長いロープ3本 ・ビブス3色(ピンク、青、赤 - 各7枚) 						
時間	環境構成(留意点を含む)		子どもの活動			指導者の活動		
2分			<ul style="list-style-type: none"> ・指導者の前に集合する。 ・みんなで元気よく挨拶をする。 ・ぶつからないように広がる。 ・準備体操をする。 			<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの表情を見ながら、指示を出す。 ・準備体操は、指導者の真似をさせて行う。 		
16分			<ul style="list-style-type: none"> ・集まって先生の話聞く。 ・4つのグループに分かれ、ルール説明を聞く。 ・先生の合図によって4種鬼ごっこをする。 ①ヒト→イヌ、イヌ→ネコ、ネコ→ネズミ、ネズミ→ヒトを追いかける。 ★結果発表 ②イヌ→ヒト、ネコ→イヌ、ネズミ→ネコ、ヒト→ネズミを追いかける。 ★結果発表 			<ul style="list-style-type: none"> ・4つのグループに分かれさせルールの説明をする。 ・どのチームを追いかけられるか再確認する。 ・始めの合図を出す。 ・捕まった人を助けに行くように声をかける。 ・縄の中にいる人たちに、縄から出て追いかけてたり、逃げたりするように助言する。 ・5分間を2回行う。 ・結果を発表する。 		
2分			<ul style="list-style-type: none"> ・先生の話聞く。 			<ul style="list-style-type: none"> ・みんな楽しく取り組めたか感想を聞く。 ・ケガ等ないか確認する。 		
【コメント】								

後述となったが、上記の指導案作成の際に以下に示す留意点を伝えたのち、実際の保育現場を想定して指導案を作成した。

教育課程・保育課程の中に運動遊びがバランスよく含まれ、年齢・時期・周囲の環境などを考慮して組み込まれる必要がある。具体的な指導案を立てるにあたっては、以下の8点に留意する。

- i) 乳幼児期の発育・発達を十分に理解して、発達に即した運動遊びを取り上げる。
- ii) 子ども一人ひとりの実態を把握し、個人差に留意する。
- iii) 教育課程・保育課程の目標やねらいとの関連性をもたせる。

- iv) 季節や地域性を考慮する。
 - v) いろいろな経験や活動が十分行えるように環境構成をする。
 - vi) 子どもが多様な遊びを経験し、様々な動作パターンが活動の中に含まれる。
 - vii) 活動に適切な指導形態を考慮する。
 - viii) 子どもの家庭環境を把握し、保護者との連携を取る。
- (井上ら、2010)

よりよい保育条件の中で保育を行うことができればよいのだが、実際には厳しい条件の所も少なくない。保育者は望ましい保育条件を求めながら、現状をいかに生かした保育をするかに知恵と努力を惜しんではな

らない。空間をうまく利用したり、新聞紙・段ボールなどの素材を工夫したりすることにより、その園独自の生きた保育が可能になる。これらを想定しながら模擬授業に臨むこととした。

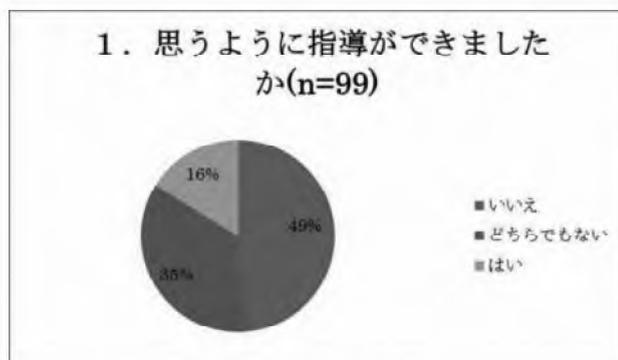
4. 結果と考察

模擬授業を終えた受講者から収集したデータより授業展開の中で、特に教材・教具に焦点を当てて考察する。模擬授業後に自己評価に関するアンケートを実施したアンケート項目は以下のとおりである。

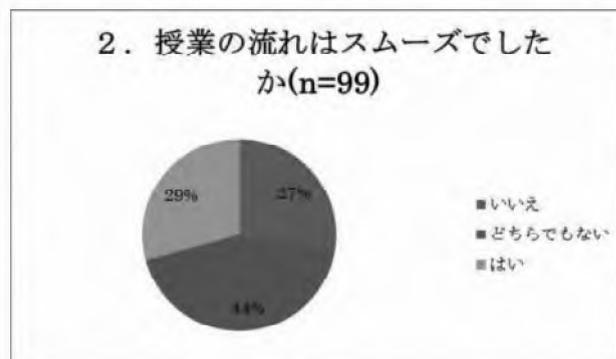
表4 模擬授業に関するアンケート項目

質問	内 容
1	思うように指導ができましたか。
2	授業の流れはスムーズでしたか。
3	教材については適切でしたか。
4	めあて（ねらい）を達成することはできましたか。
5	楽しく進められましたか。
6	自分から進んで声をかけられましたか。
7	自分のめあてに向かって支援できましたか。
8	友だちと協力して活動していましたか。
9	適切な運動活動量はありましたか。

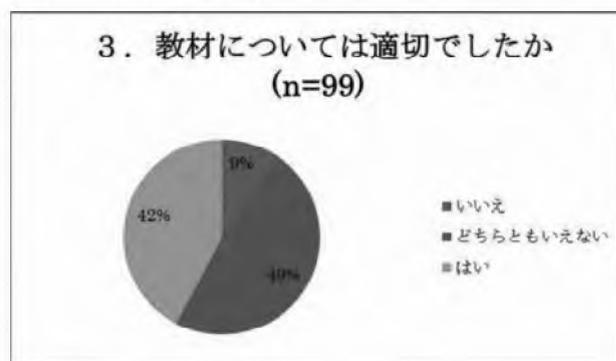
表4のアンケートについては、はい・どちらでもない・いいえの3段階の評価で回答し、最後は教材に関する自由記述の項目を設定した。以下のような学生からの結果が見られた。



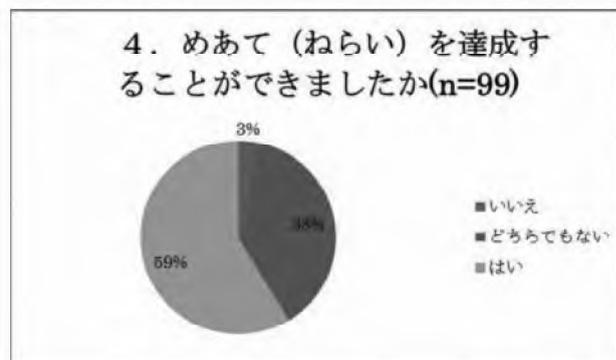
〈図1〉 質問①思うように指導ができましたか。



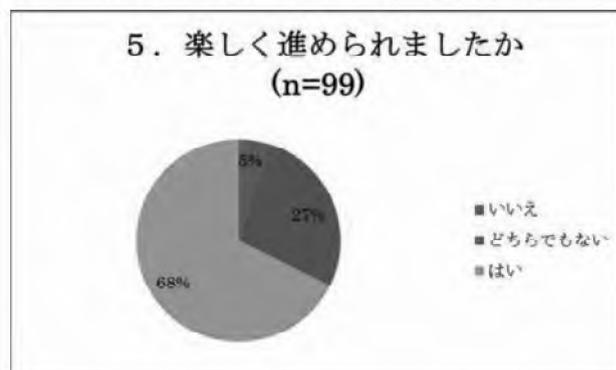
〈図2〉 質問②授業の流れはスムーズでしたか。



〈図3〉 質問③教材については適切でしたか。

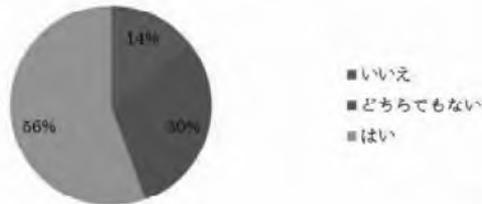


〈図4〉 質問④めあてを達成することはできましたか。



〈図5〉 質問⑤楽しく進められましたか。

6. 自分から進んで声をかけられましたか(n=99)



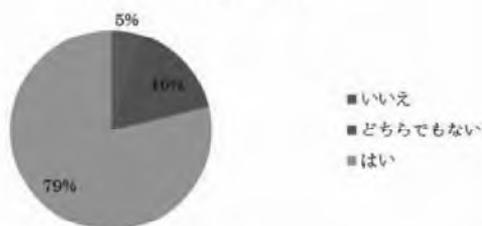
〈図6〉質問⑥自分から進んで声をかけられましたか。

7. 自分のめあてに向かって支援できましたか(n=99)



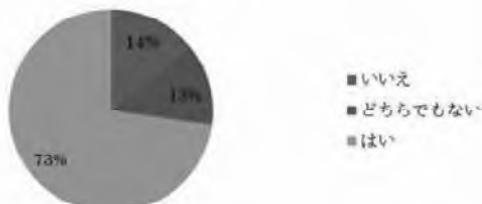
〈図7〉質問⑦自分のめあてに向かって支援できましたか。

8. 友達と協力して、活動していましたか(n=99)



〈図8〉質問⑧友だちと協力して活動していましたか。

9. 適切な運動量がありましたか(n=99)



〈図9〉質問⑨適切な運動活動量はありましたか。

教材に関する記述は以下のとおりである。

○道具に関するもの

- ・縄を使った遊びでは人数と縄の長さが適切ではなかったため、人数に合わせるのか長さに合わせるのかを明確にすればよかった。
- ・ボールを新聞に乗せて運ぶのは、バランス感覚と巧みな操作が必要だということが分かった。
- ・風船はボール操作が苦手な子でも楽しめることが分かった。
- ・ボール操作は子どもにとって難しい動作と分かった。
- ・跳び箱の段差やマットの幅で難易度が変わるが、発達段階に応じた教具を適切に設定するのは難しい。

○動きに関するもの

- ・動物のまねをする動きを広げるときには、はじめに基本となる動物の動きを指導者から提示すればよかった。
- ・鬼遊びは、鬼の数と逃げるスペースのバランスがとりにくい。
- ・音楽を使用することで、盛り上がりたり動きにリズムが出てきたりしてよかった。

○ルールや理解に関するもの

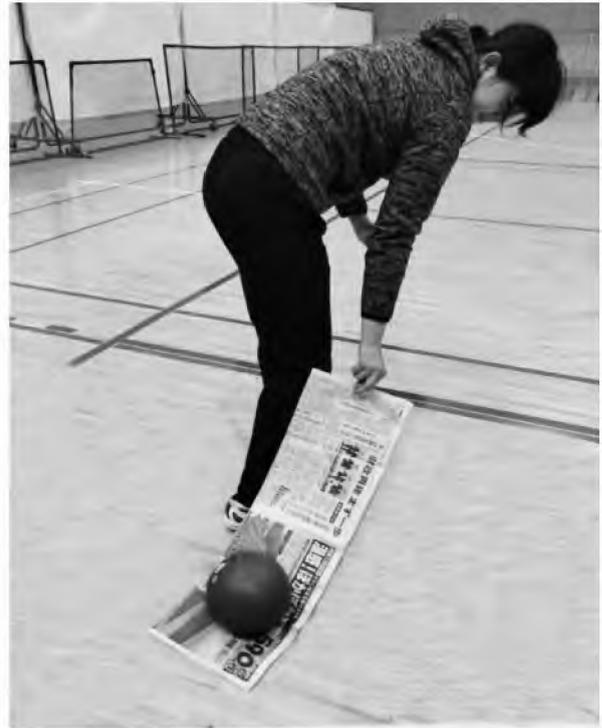
- ・鬼遊びをした時、追いかける方と追いかられる方を図に提示して紹介したので、受講者にとって分かりやすくなった。
- ・どの遊びでもルール説明やルールを理解させることは難しいと感じた。
- ・複雑な動きを入れれば入れるほど、説明にかかる時間が増え、活動時間が減った。

上記の結果から、図3において約4割の授業者が、教材が適切であったと回答しているが、授業記録からは実際に子どもたちの発達段階に適切な教材であったかどうか疑問を感じる声が多かった。また図4からは約6割の授業者が、めあて（ねらい）を達成できたと回答があったが、果たして何を基準に評価しているかが曖昧になり、明確に評価する基準を提示して回答することが必要であったと考える。

図7においては、約4割が適切な支援ができたと回答しているが、授業記録からも見られるように、上手く支援できなかつたり、助言できなかつたりする場面の記述が多く見られ、どのように言葉をかければよいか、何を言えばよいかわからなかったというような内

容を反省に挙げている。

道具に関する記述では、道具や用具の操作が入ると技能が必要となり、動きに制約が生じる姿が表出した。したがって新聞や風船などに置き換え工夫することで、本来の子どもの遊びに合ったものに変容する実践も見られた。しかし、道具や用具の使い方や固定的な動きに囚われて、その道具や用具のもつ特性を生かした方法や組み合わせを考える学生が少なかった。例えばボールなどの遊具も、いろいろな大きさや固さ、材質のものを用意することが多様な運動を引き出す可能性も持っていることや既製のものをそのまま使用するのではなく、身の回りにおいて簡単に手に入るものが面白い遊びに使えるのではないかといった視点も必要ではないだろうか。その中で、表2の「バランスリレー」の実践では、用具の準備もルールも簡単で、動きとしては用具を使う難易度が、発達段階や個人の能力によって差が少なく、なおかつ適度なバランス感覚や力加減が必要となる運動遊びが展開された。そこで動きがシンプルでルールもすぐに理解でき、適切な課題解決が重要であることを再認識できる教材であった。



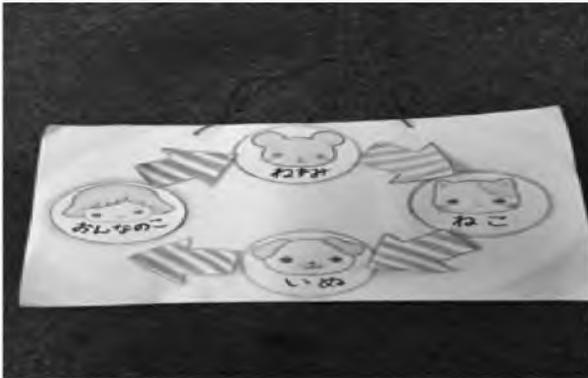
走る方向に体を向けて運ぶ姿勢



ボールの方に体を向けて運ぶ姿勢

動きに関する記述では、音楽を導入することにより、動きに躍動感が表れたり、模擬授業自体に流れが出てきたりする姿が見られた。音楽を使う際の留意点はあるが、有効に活用することにより、よりよい動きを引き出す有効な手段として受講者たちは身をもって経験したと思われる。また、動きを広げる段階では、指導者がモデルとなる動きを提示し、そこから自分の考えや判断で動きをつくったり、広げたりする活動も必要となっている。最初から自由に動かすと本来指導者が狙っていた動きとは違う方向に行ってしまう子どもたちも出てくる可能性は否めない。

理解やルールに関する記述では、子どもたちがいかに分かりやすく理解し、その運動遊びを楽しめるかが重要となってくる。表3の「4種鬼ごっこ」の実践では、4種類の動物に分かれ、どのグループがどの動物を追いかけるのかを理解させる際、ルール説明で図を提示し、子どもたちが興味関心を持てるような視覚的に働きかける教具を用意して実践を行った。



また、子どもたち側にも一人ひとりが身に付けるビブスに動物のワッペンを付けワクワクするような仕掛けを準備することができた。



運動遊びには、ルールによってその遊びが成立するものが少なくない。そのような遊びの中でもルールを絶対的なものとして子どもに与えるのではなく、子どもの能力や興味に応じて自由に変えられるものとして柔軟に考えておく必要がある（杉原、2008）が、ルールは遊びを楽しくするためのものと理解し、子どもたちが自分たちでルールを工夫したり、遊びの進行とともにより楽しく行えるようにルールを修正したりして遊びを発展させられるような援助が求められる。

模擬授業終了後に受講者が回答したアンケートについては、以下のような回答が得られた。

○印象に残った模擬授業の内容とその理由

- ・リレーは、どの発達段階でも楽しめる教材で、競争心が子どものやる気を起こさせる。
- ・ジェスチャーリレーは運動量も確保できるし、連想することや頭も使って運動するのでよいと思った。
- ・三色鬼ごっこはチームで相談する必要があるので自然に協調性が身に付くのでよいと思った。

- ・はちのこ対戦という遊びで、それぞれに役割がありねらい通り「走る」「見張る」という2つの行動を同時進行することで、頭を使ってするあそびができていた。運動量も適量でよかった。
- ・アメリカンドッジボールという遊びは、発達年齢や子どもの実態に合わせて、ルールが変更しやすいのでよかった。
- ・視覚的に分かりやすく動物の絵などを提示しながらの動物鬼ごっこがよかった。低年齢の子どもでもすぐにルールや仕組みが理解できると思った。
- ・ころがしドッジボールは、小さい子どもでも恐怖心を抱かずにボール遊びに取り組み、嫌いにならないと思った。また、難しい技能も必要ないので誰でもが参加できる遊びだと思う。
- ・ドッジボールでどんどんボールの数が増えていくとドキドキ感やワクワク感が增大すると思った。
- ・ドッジボールでコートや形の広さや形、スペースを工夫するとより楽しめる。
- ・動物ジェスチャー鬼ごっこでは、動物のまねをしている側がどんな風に表現すればよいか工夫しながらの活動になりよかった。
- ・縄あそびで、縄を跳ばずに、みんなでくぐり抜けることによって技能差がなくなり、自然に声をかけ合う姿が出てきた。
- ・ルールが簡単で、シンプルな遊びほど面白さを感じた。

○実習や現場で実践しようと思う教材とその理由

- ・音楽に合わせて体を動かすことが好きだと思っのでみんなで音楽に合わせて同じ動きをすることもよいと思っだし、一人ひとりが自由に振り付けをして踊ると更に楽しくなると思った。
- ・音楽を使った体操やダンス指導は、体力に差が出てくく、且つ子どもをのせるにはとても有効的だと思った。
- ・新聞は破れたり、ちぎれたりしても子どもたちにとって安全で安心な遊びの道具になるから、いいと思った。
- ・リズムに合わせて跳んだり跳ねたりする動きが、速さを変えることで広がると思った。
- ・動物になりきって、その動物の動きをまねしながらリレーをするといろいろな動きが身に付くと思った。
- ・ねらいとする遊びに入る前に、その遊びの要素を

んだ予備運動的な活動が入っていたのがよかった。

- ・鬼をサメに見立ててマットの上を逃げわたるゲームでは、落ちそうになるスリル感が遊びの魅力を引き出す要素があると思った。また、サメが増えていくとさらに盛り上がっていった。
- ・ボールの大きさや重さ、形を変化させることやボールの持ち方、運び方によって動きの広がりが見られてよかった。
- ・平均台は渡るだけのものと思っていたが、傾斜をつけ斜めに渡すことで、動きの幅が広がった。
- ・子どもは何かに見立ててなりきることが好きなので、なりきれる要素を含んだ遊びを仕組もうと思った。
- ・新聞紙など身近にあるもの使う遊びは、難しい技術が必要なく手軽にできるので有効的な遊びだと思った。
- ・恐怖心を取り除く遊具の工夫が重要である。例えば平均台の下にマットを敷いたり跳び箱の横に高さのあるマットを付けたりする。
- ・リレーはチームのまとまりが出たり、友だちと協力することでコミュニケーション能力を高めたりすることにつながる活動である。
- ・風船はボール運動が苦手な子でも安心して取り組める教具である。

以上のような回答から、模擬授業を行った学生は、リレーのように競争が入った遊びは、子どもたちが非常に魅力を感じている遊びと認識している。教材を工夫して提示することで、運動量が確保され、やる気を引き出す教材と位置付けられていることがうかがえた。

ドッジボールは、ボールを扱う技能が必要となってくるため、苦手な子にとっては取り扱いにくい教材だが、ルールや教具の工夫によって、取り組みやすくなる教材に変化することを実感している。

また、音楽を効果的に使った内容は、子どもたちも盛り上がり、動きにも活気が出てくると感じている。自分たちも含め、音楽が適切に使われると運動量も自然に増えていくことが実証されたといえよう。

教具に対する恐怖心を取り除いたり、不安な気持ちを安定させたりすることは幼児体育にとりくむ上で、非常に重要となってくる要素である。模擬授業を通して、日常行われる運動遊びが、今後の運動習慣に結びついていく大切なスタート位置として認識できたと考えられる。

5. まとめ

本研究の模擬授業は、今後幼児体育を指導する立場となるであろう履修する学生を対象とした。したがって実際に子どもたちに指導したときの反応や手応えを感じるかということや少しは体感できたのではないかと推察される。しかし、実際は学生を幼児に見立てて実施していることもあり、課題設定が非常に困難になる。なぜなら学生の運動欲求が満たされる教材になると本来幼児にとって難易度の高いものになり、幼児に適切な教材であった場合、学生の運動欲求が満たされないため模擬授業自体盛り上がり欠けるからである。その結果、授業者の自己評価が低くなり、自分の模擬授業が失敗と判断する。また、教材のもつ本質的な魅力や特性を理解して指導する以前に、人前で説明して指導する経験が極端に少ないために、それだけで精一杯になり、考えが及ばない学生も少なくはなかった。振り返りに関しても教材に焦点を当てた振り返りが少なく、授業に対しての心構えや準備、立ち居振る舞いのことを中心に振り返る記述が多くなり、めあてやねらいに迫る指導についてのリフレクションが不十分であった。今後、改善し検討を加える必要があると考える。

その中で省察の重要性として教師の成長をもっと強く動機付けるのは、自らの実践経験に対する「省察」と「反省」であり、その教師の経験を熟知した同僚の助言にある(佐藤、1994)といわれるが、同じ境遇にある学生同士の相互評価は、評価される授業者の学生にとって大いに励みとなり、アドバイスも素直に受け入れられた。反対に評価する学生も客観的な授業分析ができ、自らの模擬授業や指導案作成、教材研究をする際に非常に役立ったことはいままでもない。そして更に模擬授業を通して教材の視点や授業のポイントとなる点が見えてきたことも大きな成果である。

教材や教具を創意工夫することでよりよい授業展開になることや、教材の本来のもつ特性に触れることにより、その運動遊びの楽しさを味わう授業であれば、もっとその重要性に気づくことができたのではないかと考える。

指導者として幼児の発達段階によって適切な教材を与えることの重要性や困難性、実態に合わせて指導内容を変容させる大切さを学べたことは大変価値ある経験である。

今後の課題として、保育の現場では、保育者が「どういう動きがよい動きであるのか」をしっかりと示す能力（示範能力）をもつことが重要とされ、また、目の前にいる子どもの動きの課題は何であるかを判断し、発達状況に応じた指導方法（言葉がけ等）を示せることが求められている。どのような教材を用いることによってその指導方法が導かれるのか、教材を創意工夫することにより「動き」にも注目できる内容を検討する幼児体育を実践していくことを目指す。

6. 引用文献・参考文献

- 高田佳孝 (2016) 「幼児体育」における教材開発に関する一考察 夙川学院短期大学教育実践研究紀要 (第9号) pp.28-32
- 前橋 明 (2008) 幼児体育—理論と実践— 大学教育出版 p13-16
- 岩崎洋子、吉田伊津美、朴 淳香、鈴木康弘 (2012) 保育と幼児期の運動遊び 萌文書林pp.8-9
- 前橋 明 (1999) 幼少期の体育はどうすべきか：幼児教育と小学校体育の連携を 体育科教育 大修館書店pp.30-31
- 文部科学省 (2015) 幼児期運動指針ガイドブック 幼児期運動指針策定委員会p.7
- 菊池秀範 (2004) 幼児期の運動あそびの指導と援助 萌文書林p.8
- 杉原 隆、米谷光弘、本橋寿世、平野登志子、神戸新子、松本 尚 (2008) 新版幼児の体育 建帛社 p.50-51
- 岩田 靖 (2007) 体育の授業を創る 高橋健夫編著 第2章 体育の教材づくり 大修館書店 p.28
- 岩田 靖 (2012) 体育の教材を創る 大修館書店 pp.25-26
- 岩田 靖 (2002) 体育科の教材・教具論 高橋健夫、岡出美則、友添秀則、岩田靖編 体育科教育学入門 大修館書店 pp.73-80
- 岩田 靖 (2003) 体育になぜ教具が不可欠か 体育科教育51 (10) 大修館書店 pp.10-13
- 大貫耕一 (2015) よい体育授業を求めて 体育授業研究会編 第1章—6 大修館書店 p.43
- 大貫耕一 (2010) 体育科における教科内容の検討 体育授業研究会編 体育授業研究13 : 37-45
- 井上勝子、青木理子、青山優子、大村一光、黒岩英子、下釜綾子、高原和子、宮嶋郁恵 (2010) すこやか

な子どもの心と体を育む運動遊び [第2版] 建帛社p.133

佐藤 学 (1994) 教師文化の構造 稲垣忠彦、久富善之 日本の教員文化 東京大学出版社p.33

ピアスーパーバイザーからのコメント

本稿は本学の必修科目「幼児体育Ⅰ」「幼児体育Ⅱ」をご担当の両先生方による授業実践報告です。

「幼児体育Ⅰ」で履修した教材教具をさらに創意工夫して模擬授業につなげていくという指導内容により、学生の実践力がより高まっていくことが伺えます。模擬授業後の自己評価に関するアンケートも丁寧にとられており、そこから様々な問題点を考察されておられます。模擬授業の取り組みにおける学生の様子やポイントなど教科はちがってとても参考になる報告です。

(担当：井本 英子)